

# 「語源の話」

群馬県立女子大学教授 北川和秀

なぜ語源は分からなくなるのか

時を経て語の形が変わるから } できるだけ古い時代にさかのぼって  
 時を経て語の意味が変わるから } そこからの変化をたどることが必要

\* 語源を考えることは、ことばの歴史を深く知ることにつながる

## 1. 地名起源説話

(日本武尊) 碓日坂に逮ります。時に日本武尊、毎に弟橘媛を顧びたまふ  
 情有ります。故、碓日嶺に登りて、東南を望りて三たび歎きて曰はく、  
 「吾孀はや」とのたまふ。故因りて山の東の諸国を号けて、吾孀国と曰ふ。

(日本書紀景行四〇年は歳)

\* 碓氷坂・足柄坂の東 坂東 碓氷関・足柄関の東 関東

## 2. 導入(やさし、うつくし、こ、ねこ)

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

(万葉集 巻5 - 893 山上憶良)

\* 「やさし」は、動詞「瘦す」と語源を同じくする形容詞。身も細るようだ。

肩身が狭い 遠慮がちで控えめだ → 優美だ、思いやりがある  
 → 平易だ

父母を見れば尊し 妻子見ればめぐしうつくし 世の中はかくぞ道理

(万葉集 巻5 - 800 山上憶良)

うつくしきもの 瓜にかきたるちごの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなるちごの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなるおよびにとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。... 雛の調度。... なんにもなにも、ちひさきものはみなうつくし。... (枕草子 154段)

\* 「うつくし」は、かわいく思うこと。いとしく思うこと。平安時代には小さいものをかわいいと思う気持ち。

「こ」さまざま

a 海鼠(なまこ)、熬子(いりこ)、海鼠腸(このわた)

b 蚕(かいこ)、桑子(くわこ) \* 飼ひ蚕

\* たらちねの母が養ふ繭隠りいぶせくもあるか妹に逢はずして

(万葉集 巻12 - 2991)

c 茸(きのこ)、筍(たけのこ)

d 鳥の子(とりのこ)、卵(たまご) \* 玉子(たまご)

e 眼(まなこ) \* 目な子

「ねこ」の語源

- ・ 諸説あり。よく寝るから(寝子)、寝るを好むから、ニコ(似虎)の転など
- ・ 鳴き声説が有力。

\* 猫のかしづきをして、撫で養ひたまふ。... 端近く寄り臥したまへるに、

来て、ねうねう、といとらうたげになれば、(源氏物語 若菜下)

\* べこ(牛。べーべー)、ねこ(ねうねう)、からず、すずめ

\* 「猫」という漢字の字音「メウ」(呉音)も鳴き声に基づく。

### 【語源を考える上で必要なこと】

漢字表記にはとらわれない。

できるだけ古い時代の語形・語義にさかのぼって考える。

歴史的仮名遣い(旧かな)で考える。

奈良時代以前の語は、上代特殊仮名遣いにも留意する。

ローマ字で考えてみる。

同種・同類の例を探してみる。

## 3. 露出形と被覆形

【単独だと工段、熟語になるとア段】

つめ(爪)	つまさき(爪先)	つまづく(爪突く)
	つまはじき(爪弾き)	つまびき(爪弾き)
	つまむ(摘む)	つまようじ(爪楊枝)
さけ(酒)	さかぐら(酒蔵)	さかだる(酒樽)
	さかづき(酒盃)	さかな(肴)
	さかば(酒場)	さかもり(酒盛り)
	さかや(酒屋)	
あめ(雨)	あまおと(雨音)	あまがえる(雨蛙)
	あまがさ(雨傘)	あまぐ(雨具)
	あまごい(雨乞い)	あまだれ(雨垂れ)
	あまど(雨戸)	あまもり(雨漏り)

かね（金）	かなあみ（金網）	かながた（金型）
	かなぐ（金具）	かなしばり（金縛り）
	かなづち（金槌）	かなぼう（金棒）
	かなもの（金物）	
いね（稲）	いなご（蝗）	いなづま（稲妻）
	いなば（稲葉）	いなほ（稲穂）
め（目）	まつげ（目つ毛）	まなこ（目な子）
	まなざし（目な差し）	まなじり（目な尻）
	まばたき（目叩き）	まばゆい（目映い）
	まぶた（目蓋）	まへ（前／ま（目）＋へ（方））

【単独だとイ段、熟語になるとオ段】

き（木）	こかげ（木陰）	こがらし（木枯）
	こぐち（木口）	こずえ（木末）
	こだち（木立）	こだま（木霊）
	こっば（木端）	このは（木の葉）
	こもれび（木漏れ日）	
ひ（火）	ほづつ（火筒）	ほてる（火照る）
	ほなか（火中）	ほのほ（炎／火の穂）

\*「穂」は「秀」。稲穂、波の穂、槍の穂先、伊香保、穂高

4. 頭子音 S の有無のペア

死ぬ（ナ変）	s i n u
去ぬ（ナ変）	i n u
咲く（四段）	s a k u
開く（四段）	a k u
据糸（下二段）	s u w e
植糸（下二段）	u w e
棄つ（下二段）	s u t u
うつ（下二段）	u t u
薩摩	s a t u m a
あづま	a d u m a

5. 漢語起源の言葉

- ・ 銭（セン ぜに）、馬（マ むま）、梅（メイ むめ）、
- 鬼（オン（隠） おに）、縁（エン えにし）
- 訓と間違えそうな音
- ・ 菊（キク）、駅（エキ）

6. 女房言葉

語の下部を省略し、上に「お」を付ける

- ・ かき餅 → お + かき（もち） → おかき
- ・（副食物の）数物 → お + かず（もの） → おかず
- ・ 強飯 → お + こは（いひ） → おこは
- ・ 田楽 → お + でん（がく） → おでん

語の下部を省略し、下に「もじ」を付ける

- ・ 髪（かみ） → かもじ
- ・ 杓子（しゃくし） → しゃもじ

語の最初の音を繰り返す（その上に「お」を付けることもある）

- ・ 酒 → ささ
- ・ かつをぶし → おかか

7. 地名表記（近江・上野について）

「近江」はどうして「おうみ」と訓むのか？ 「おうみ」の意味は？

- ・ 「うみ」という語は、海水の海だけでなく、淡水のうみ（湖）も含んだ。
- ・ 淡水の「うみ」を指す語には、「みづうみ（水海）」または「あはうみ（淡水海）」がある。海水の「うみ」は「しほうみ（塩海）」。
- ・ 現在の滋賀県は、日本最大の湖である琵琶湖があるので、淡水国といった。よみは「あはうみ」「あふみ」。
- ・ 現在の静岡県西部は浜名湖があるので、「遠淡水（とほつあふみ）」の国といった。今の滋賀県は「近淡水（ちかつあふみ）」の国。遠近は都から見て。
- ・ 大宝元年（701）頃、国名は漢字二字と定められた。「近淡水」「遠淡水」はともに漢字三字なので、「淡水」を「江」と置き換え、「近江」「遠江」と改めた。よみは従来通り、「ちかつあふみ」「とほつあふみ」のまま。
- ・ 両国を区別するのに、遠江を「とほつあふみ」といえば、近江をあえて「ちかつあふみ」という必要はなく、単に「あふみ」というようになった。
- 「上野」はどうして「こうづけ」と訓むのか？ 「こうづけ」の意味は？
- ・ 現在の群馬県・栃木県は、古くは「毛野国（けののくに）」といった。
- ・ この国を二つに分け、「上毛野（かみつけの）」「下毛野（しもつけの）」と呼んだ。都に近い方が「上」、遠い方が「下」。
- ・ この両国名は、漢字二字化の折、中間の「毛」の字を切り捨てて、「上野」「下野」とした。よみは従来通り「かみつけの」「しもつけの」のまま。
- ・ やがて、時代が下るにつれて、「かみつけの」「かみつけ」「かんづけ」「かうづけ」「こうづけ」と変化していった。